

ささえあう

2008年
7月25日
第7号

事務局 大分市大字森679-6 リフォーム夢舎内 TEL・FAX097-527-5443

ネットワーク3年目に

「地域で安心して暮らしたい」という願いを込めてスタートした大分精神障害者就労推進ネットワークは6月15日、別府大学メディア教育研究センターで第3回総会を開きました。昨年を上回る約90人が参加し、昨年の取り組み報告を受けて、3年目を迎えたネットワークの1年間の取り組みについて話し合いました。

昨年度は、福祉医療機構の助成を受けて「精神障害者就労推進セミナー“支援があれば働け



広がる就労、多様な働き方

第3回総会を開催しました

「支援があれば働ける」を地域で広げよう

る」の開催、「ささえあいマニュアル 大分で生きる大分ではたらく」の発行など積極的な取り組みを行いました。その結果、当事者も支援者も「精神障がいがあっても適切な支援があれば地域で働くことができる」という自信を持つことができました。

地域の取り組み広げたい

新年度は、昨年の成果を地域に広げ、就労を支援するネットワークづくりをめざすことになりました。具体的には、県内3地域において「フォーラム」を開催する 企業や事業者への働きかけを進める 農業の可能性調査を行うという3つの目標を中心に取り組みをすすめます。地域で広がった人のつながりを具体的な取り組みに結びつけることが課題になってきます。ぜひ協力して取り組みましょう。

総会に続いて記念フォーラム「広げよう！就

労の輪 - 地域からの報告」が行われました。地域で就労の支援や就労の場を広げる取り組みをしている人たちの報告を受けて、会場も含めて活発な意見交換が行われました。

「一歩ずつ一般就労を進めている就労継続支援事業所」、「高齢化が進む団地で朝市を開き生活訓練施設で作った野菜を販売して地域の理解を進めている話」、「働く場として農園づくりやレストラン計画」、「介護の職場で精神障がい者の雇用を進めている取り組み」などが報告され、地域で働く可能性が広がっていることが実感されました。

参加者からは、「こうやれば」といった積極的な提言や、「就労の道が少しずつ広がっている」、「県全体の行政や支援機関、事業主等の連携が必要」、「力をいただいた」などの声が聞かれました。

3年目のスタート！今年も頑張りましょう。

大分精神障害者就労推進ネットワーク 第3回総会記念フォーラム 「広げよう! 就労の輪 地域からの報告」(1)

6月15日の第3回総会の記念行事として開催した「広げよう! 就労の輪 地域からの報告」は、いろんな可能性が地域にあることを教えてくれる有益なフォーラムでした。今号と次号の二回に分けて掲載します。(文責・事務局)

コーディネーター

三城 大介(別府大学文学部人間関係学科准教授)

報告者

藤波 志郎(障がい者福祉サービス事業所ひので)

白石 一徳(生活訓練施設フライハイム)

神田 道子(有限会社オーシャン企画)

矢野由美子(LLCハートブリッジ)

(敬称略)

8割は「支援があれば働ける」 三城
三城 最近のアメリカの精神医学界の研究発表で、精神障がいをお持ちの方で「就労が困難、長期的な療養が必要な人は2割以下」という統計が出ています。ということは、8割以上の方は支援があれば働けるということになります。アメリカ人だけが特別ということはないわけです。我が国でも、ほとんどの方が働けるということです。

このネットワークが、「支援があれば働ける」ということをテーマにずっと取り組んできて、ありがたいことに多くの地域の方達から「もっとつながってくれ」「もっとこういうことをしたらどうか」と、企業の方、施設の方、実践をされている方、いろんな方達からいろんなお話をいただいています。

今日のパネラーの方達は、地域で非常に興味深い取り組みをされています。お話を聞いて、これをこうアレンジしたらこう使えるのではないかといったヒントを皆さんと一緒に考え、どう組み立てればどんなことができるかをみんなで考えていければと思っています。

まず、何を目的に、誰を対象に、どういう取



り組みをしているかについてお話していただきたいと思います。

印刷・ハーネス・農産物販売も 藤波

藤波 社会福祉法人そよかぜ障がい者福祉サービス事業所ひのを運営しています。平成19年の1月1日に「障がい者就労継続支援B型」に移行しました。月曜日から土曜日まで開所、9時から16時までの時間帯でサービスを提供しています。作業の内容は名刺、ハガキ、冊子、コピー、ラミネート等の印刷業務、またハーネス作業、プラスチック製品のカット、あるいは農産物の販売、パソコン教室、日出町指定ゴミ袋販売、有価ゴミ(段ボール・アルミ缶・新聞紙・古雑誌等)を回収、また清掃、地区の草刈り等もしています。

私たちの目的は、利用者の皆さんが自立に向けて社会復帰訓練をして地域の人々とともに生活し、さらに就労できるようになることです。

職員と一緒に仕事をしても工賃は少ないです。5~6万円くらいの工賃が支払えればいいのですが、厳しい状況です。やはり、「一般就労したい」、「訓練実習したい」という希望が出てきます。私も、就労ネットの皆さんと一緒に活動していく中で何とかしなければいけない、事業所に集まりサービスを提供するだけで終わったらダメだと考え、希望する人はどこか

に就労の世話をしなければいけないのではない
かという気持ちが強くなってきました。

会社に“飛び込み”で

そこである人の紹介で、日出町の有限会社エム・オー・イーに飛び込んでいきました。社長に会い訓練の受け入れをお願いしました。

「私たちの事業所では、朝9時から午後4時までの間で就労のための訓練を行っています。しかし、実際の企業でなければ実感ができませんので、訓練実習ということをお願いできないだろうか」と頼んでみました。

社長も障がい者への理解がありました。「障がいがあろうがなかろうが、意欲を持って働くことはすばらしい」という話をいただき、受け入れてもらえることになりました。「規模のみを追わず、誠意と独自の技術を持ち広く世界の文化と福祉向上に貢献する」という考えを持った企業でした。

「ずっと連携して」で信頼関係

最初、3か月を目途に受け入れを始めてもらいました。時間は9時から16時までということで、4名でスタートしまして、そのうち2名は「そのまま続けたい」ということで、この6月1日からパート雇用として採用されました。

企業との連携で一番必要になることは、「就労してしまったら連携は切れるんですかね」ということでした。「いえいえ、ずっと連携しているんなことがあれば話し合いをしながらやっていきましょう。それが送り出していく私たちの仕事です」ということで安心をしていただきました。

就労した2名の方には、「1週間に1回は必ずひのでに来るんですよ」と言っています。そして個別支援計画の日報等も書いてもらって、支援を続けています。

企業に安心してもらうためには「必ずケアできる」「問題があっても連携を取って、情報を交換しながらやっていきましょう」ということで信頼関係を作ることだと思います。

地域に受け入れられるために 白石

白石 大分市にあります生活訓練施設フライハイムの白石といいます。精神障がい者への地域の理解を広げていくために、去年12月15日のフォーラムで講師の北山さんから「精神障がい者はまじめである。精神障がい者の特性を理解していただければ企業や地域の方に受け入れられ、一緒に生活できるのではないか」ということを教わり、自分たちに何ができるのかということのを改めて考え直した次第です。

まず現状を把握し直さなければということ、施設の周りを見ると農家があり、山もあります。精神障がい者の施設や病院の多くは僻地にあります。でも大分市では、山の向こうには団地が建設されていて、その団地もすでに30年という高齢化の地域特性が浮き彫りになっているのを把握したのです。

スタッフで相談

まず、地域の方に精神障がい者の特性をどうやったら理解していただけるのか、スタッフで考えました。法人（病院・施設）で祭や盆踊り等行っていますが、それには地域の人は全く参加してくれません。「法人側からも、地域への呼びかけを行っていなかった」、「病院からまず呼びかけるべきではないか」、また「ゲートボールなんかに参加させてもらえば」という声もありました。しかしうまくいかない。結局ニーズを把握し切れなかったんですね。

今年3月、困っていたところに、「福祉のまちおこし研究大分」という報告会が大分市内でありました。大分大学の椋野先生が研究されているもので、施設の隣の松が丘地区(千三百世帯)、近くの富士見ヶ丘地区(二千数百世帯)の住民の調査の報告でした。これに参加したことにより、高齢化している団地の状況を知ることができました。高齢世帯ばかりになって、若い人がほとんどいなくて、買い物にも困っている、自治会にも参加できないといった実態がわかりました。

団地の自治会を訪問

この実態に結びつけて何かできないかと考えました。施設で社会復帰をめざす人たちに園芸を教えて、野菜作りなどを行っています。その野菜を提供できないだろうかと考えました。でも10名くらいで作っている野菜では1300戸には少なすぎるので、宗方台というその隣の団地の自治会長さんに作物を持って行って、「こういうものを作っているんですが、月に一回、“朝市”をやらせてもらえないでしょうか」とお願いしました。「精神障がい者の方が一緒に販売して地域の理解を広げ、地域の方にも喜ばれるようなことができれば」という思いに快く応えていただき、今年の4月24日に第1回目を行うことができました。

のぼりを立てて野菜の“朝市”

野菜とフライハイムを紹介するパネル、そしてのぼりを準備しました。10時半開始の予定でしたが、10時からチラホラ高齢者の方が集まり始め、集まり過ぎたので10時25分にスタートしたら、すぐに野菜がなくなりました。30分過ぎに来られた方からは「一つもないじゃないですか」というお叱りを受けることになって、「時間を守ろう」ということになりました。次は5月29日でしたが、倍の方が見えられて、20分程度で品物がなくなりました。

6月になって作物もたくさんできましたの



で、ついこの間12日に臨時で開催しました。そしたら松が丘の自治会長さんが来られて、「ぜひうちでもやってください。ぜひお願いします」ということで、いま話がどんどん広がっている状況です。

“地域のお手伝い”が理解広げる

地域の方のニーズにあわせて、障がい者の方がどうやったら“地域のお手伝い”ができるかと考えることが必要だということを感じています。私たちはこの取り組みの結果、精神障がい者が地域で生活をする、理解をしてもらうということ、地域の方を含めて前向きに考えていくことができるようになっていきます。

30年前に授産所を開始 神田

神田 私は30年前に家で授産所を始めました。今、大分市の吉野で社会福祉法人新友会ひまわりの家として活動を続けています。そして20年前、中小企業家同友会に加入しました。2000年に大分で同友会の大会があり、それをきっかけに大分でも障害者委員会が設置され私も参加しました。

精神障害者就労推進ネットワークに参加して、精神障がい者の就労の現状は本当に大変だと感じています。地域の理解と協力が必要だと考えています。

「ブラボーファーム」立ち上げへ

今回、私どもの会社で「ブラボーファーム」を立ち上げようとして取り組んでいます。きっかけは「Be空間」という冊子です。緑・水・土の大切さへの思いを込めた小さな冊子が一人歩きし、いろんなつながりが生まれました。そしてそれを形にしようと、地域のコミュニティーづくりとして進めることになったのです。

大分市の庄の原に福祉目的で準備してきた土地が約2万坪あり、農業を主として障がい者の就労と結びつけた「農園」を立ち上げようとしています。障がい者が働けるレストラン、販売所などもつくりたいと考えています。

地域に根ざした福祉に

これからの福祉は地域に根ざした福祉でなければいけないという思いが根っ子にあります。いろんなことを企業経営から学び、また地域で学び、開放していかねばならないという思いからの計画です。

障がい者だけでなく、高齢者、青少年の育成も活動目的にして、地域でみんなが参加できるコミュニティーを作りたいと取り組んでいます。また、観光にも結びつけ、地域おこしもできるのではないかと考えています。

いま、10月の全国障害者スポーツ大会までには何とかオープンしたいなと、土の入れ替えから大騒動で進めているところです。皆さんのお力をいただきますようお願いいたします。

“家族ケア”の視点で 矢野

矢野 家族ケアをコンセプトにした在宅ケアの専門事業所で、大分市中央町の若草公園の近くにありま。介護保険制度が始まる前から高齢者の在宅ケアを行っていた仲間で立ち上げた会社です。精神障がい者のことはわからないまま、このネットワークに参加させていただいたという状況です。

看護や介護が大好きで、そのことだったら何時間も語れるようなスタッフでスタートしました。家族一人ひとりの、それぞれのライフステージに出てくる困難な課題に対して、それを解決していくことをめざしています。就労支援も、家族ケアの一部として困っていることへの応援とお手伝いをするサービスの一つとして取り組みました。

「週1時間」からでも働ける

看護・介護の世界では、家族のケアをすることについて「家族社会学」という視点で考えますが、家族が困ったときの相談相手として対応する際の手段として就労支援に取り組んでいます。本人だけではなくて、親御さんとか子どもさんとか、ご兄弟の方とか、友人とか、本人を



取り巻く生活環境をしっかりと把握して、就労支援計画を立てて、本人の持つ得意なことを見つけて、何ができるのかを考えます。

ハートブリッジはケアの事業所ですので、働きたい方がケアの中でもどういうケアの部門に向いているのかを評価した上で、仕事に就いていただくという方法をとっています。

就労時間もフレキシブルです。在宅ケアはそうでないとやっていけませんので、1時間から始めることができるような体制をとっています。週1時間からでも大丈夫です。

その人にあった「個別支援」が重要

三城 私も、学生をハートブリッジに派遣してお手伝いさせていただいております。精神障がいをお持ちの方は小さなステップを積み上げていかないと、いきなり8時間、フルタイムの就労が非常に難しい面があります。ホームヘルプサービスなどは、週1回とか、週1時間といった細かいサービスがありますね。だから、精神障がいの方の状況に合わせて、「週1回1時間」から始めてみましょうということができるとすね。

アメリカに“ACTモデル”があり、そのなかに個別的就労支援（IPS Individual Placement and Support）という制度があって、「この人は週1回1時間」とか、「この方は週2回1時間」、「この方は毎日2時間いけるかな」とその人に合わせてプログラムを組んでいきます。小さなステップを組み合わせながら、その人にあった個別の支援を行っていくことが重要です。

訪問看護、訪問介護の職場のマイナスの面、仕事の時間が細切れで、家から家に通う間に時間がかかったりしますが、そこを逆手にとって精神障がいの方々の雇用に結びつけようという全国的にも余り例がない取り組みです。

（以下次号に続く）

和歌山県田辺市・みなべ町
紀南就業・生活支援センター
指定障害福祉サービス事業所すまいる
現地調査 報告(2008年3月4～5日)

昨年12月の「就労推進フォーラム」で講演をしていただいた北山守典さんの紀南就業・生活支援センターへの現地調査(5名参加)が実現しました。精神障がいがある人たちが地域に受け入れられて生きるためのいろんな可能性を見せていただきました。皆さんに誌上で報告します。



指定障害福祉サービス事業所すまいる

紀南就業・生活支援センターと指定障害福祉サービス事業所すまいるは和歌山県田辺市、みなべ町など、一市五町人口約14万人の地域を担当している。最初に「すまいる」で北山守典所長から話を伺った。

「すまいる」は1階が事務所、2階が授産施設になっており、利用者は33名。企業に働きに行っている人が多く、ここでは10数人が梅の加工品を箱詰めしていた。「工賃は売値の1割」と聞き一同ビックリ。「よいコミュニケーション」の張り紙が目についた。



東農園

藤原紀香の結婚式の引き出物を提供したという注目の農園。大きな倉庫には樽に入った梅がぎっしり。ここでは数人を受け入れてもらっているようだ。

またその結婚式で使われたという剪定した梅の枝を削った箸づくりを見学。インターネットでは2膳分で1500円の値がついてるとか・・・。



高田果園



「南高梅」発祥の地という由緒ある農園。やはり積極的に就労を受け入れてもらっている。大きな立派な梅を一粒ずつ丁寧に扱っているのが印象的だった。今は減塩に挑戦中とのことで、一歩先をめざす姿勢が強く感じられた。



畑地や山肌にはほとんど梅が植えられている。ちょうど花が満開だった。

エコファーム絆

NPO法人として障がい者を受け入れ、ハウスで椎茸を栽培し、ケース詰めして一年中、出荷している。大阪の大きなスーパーなどと取り引きが続いており、一度に大量の注文が来て断ることも。近く就労継続支援A型に移行するとのこと。



ハウスの暖房の燃料に食用廃油を精製したものを使用していることから、製品名は「エコ紀伊茸^{きいたけ}」。原木代わりになる“菌床”を一万本以上棚に並べていて、毎日収穫できるそうだ。包装用の立派な機械は、補助金で購入した。みんな忙しそうに作業していた。



くまのK・OIL作業所

エコファームの燃料を精製しているのが「くまのK・OIL作業所」。ホテルやレストラン、近くの町内会などから廃油を集め、1日に500キロリットルほどをバイオディーゼル燃料に変身させる。1リットル60～65円くらいででき、運送会社でも利用している。説明してくれた打越さんの誇らしげな姿が働く喜びを伝えてくれた。



紀南就業・生活支援センター



田辺市内の900㎡の土地に、231㎡の新しい建物。当事者も参加した建設委員会で間取りも検討したため、使いよい施設になった。就業支援ワーカー、生活支援ワーカーに加え、ジョブコーチが4名もいる。当事者組織であるワーカーズクラブの拠点にもなっている。

みなべ鹿島ホーム（グループホーム）

海を望む絶景の地にある。まわりは住宅（別荘）地。出費軽減を進めていたある企業の保養所を譲り受けたとのことで、温泉もある。就労を



前提に12名が暮らし、バイクや自転車などで職場に通っている。「ここに来ていいことばかり」と



いうつぶやきを耳にした。部屋の中を見せてもらった。ゆったりした空間で一人暮らし。ただ、期限は3年とのことだった。今、近くに女性のグループホームを準備中。これも企業の協力によるそうだ。

「紀南モデル」 - 三城先生のワンポイント解説

紀南モデルは、センターを中心にネットが構築されているため、当事者、家族、事業所、医療、行政等、当事者の継続支援に関わる相談や連絡がセンターに集約されている。就労移行より継続が困難といわれている精神障害者支援にあって、情報の整理を効率的に行っているのは興味深い。

特筆すべき点として、「ワーカーズクラブ」と「ワーキングライフネットクラブ」という当事者組織が存在する。前者は就労をしている当事者の組織で、後者はGHなどを利用し就労訓練に参加している当事者の組織である。ピアカウンセリングを中心とした活動を行っており、継続支援に好影響を及ぼしているとのことである。

紀南モデルをそのまま、大分に移入することは困難であろう。しかし、戦略的に地域のリソースをコーディネートし、就労支援の仕掛けを作っていくノウハウは大いに学ぶべきである。

別府大学文学部人間関係学科准教授 三城大介

情報コーナー

県の取り組みを紹介します

第3回総会では、行政の取り組み報告も行われ、県商工労働部雇用・人材育成課の荒川さんからは「障がい者雇用応援団事業」について、同じく村井さんからは「障がい者職業能力開発事業」について説明をいただきました。以下紹介します。

障がい者雇用応援団事業

障害のある方の雇用、職場実習、見学の受け入れに積極的な企業を県で開拓して紹介していく事業で、昨年より開始しています。情報を支援機関等に提供することによって、就労を促進しようとする事業です。

昨年10月からは企業開拓員（社会保険労務士）を置いて、県内の企業を精力的に回っていただき、現在131社（申請中を含めると160社）に応援団として手をあげていただくなど成果を上げつつあります。

障がい者職業能力開発事業

職業能力開発校（大分・日田・佐伯・別府（竹工芸））が企業や法人に委託して実施している事業ですが、今年度から新たに企業の現場を訓練現場として活用する訓練科目を設けました。

「障がい者と企業を個別にマッチングし



て現場で訓練実習して、その企業で就職をめざす」ことをコンセプトとしています。

障がい者と企業のマッチングを担当するのは、障がい者職業訓練コーディネーターで、これまで1名でしたが、今年度は4名に増やしました。大分・日田・佐伯・別府に配置しています

訓練終了後、雇用できるときには「トライアル雇用」の制度などを利用しながら進めていくこととなります。

いま4名が訓練中です。

ぜひご利用とご協力をお願いします。

・訓練期間 3か月

（6か月まで延ばすことができます）

・訓練時間 月100時間

（最低60時間から）

・受講料は無料

・事業主には一人あたり月6万3千円支給

・受講生は訓練なのでお金は入りません

問い合わせ先

大分県商工労働部雇用・人材育成課

097-506-3342

編集後記

三城副代表が記念フォーラムの中で触れたように、当初「1年持たない」と言われた（？）就労推進ネットが3年目に入った。ただただ、「働きたい人が働けない」、「地域の差別のためつらい思いをしている」、「親が高齢化するなかで子どもは地域の受け入れ先が足りない」という現実を何とかしたいという思いだけのスタートだった。藤波代表と安部事務局長のもと、1年目は、お金（補助金）も人（専従スタッフ）もなく、すべてボランティア精神に頼り、手作りの取り組みだった。2年目は福祉医療機構の助成を得て、大きな取り組みができた。さて3年目は、またボランティア精神の取り組みになる。しかし行政も積極性を感じさせてくれるし、障害者職業センターや県総合雇用推進協会なども意欲的だ。精神障がいがあっても、適切な治療と支援を受けながら地域で暮らすことはあたりまえ。仕事をして、収入を得て、自立もできる。そんな地域を実現するために、今年度も皆様と協力して取り組みたいと思います。よろしくお願ひいたします。（〇）